福島党首との確執はあったのか

「体重5キロ減りました」

「育ての親」の社民党を見限る決断をした。議員になって15年目、50歳にして「日本の政治を私が担う」と。

――福島瑞穂党首と会談したのは離党届を出す当日の朝でした。ちょっと唐突だったのでは。

「参院選が終わってすぐに事務所を通じて面会のお願いはしていたんです。離党を決める前に一度は議論したかったから。決めようとした日程が2度キャンセルになって、その後も時間を合わせようとしましたが『当分忙しくて会えない』。私から本人の携帯に直接電話してもつながらなかった。いつもはすぐに返してくれるのにおかしいな、と。ちょっとさみしかったですね。福島さんは20代のころからの市民運動仲間。政界に誘ったのも土井たか子さんと私なの。本当につらかったから早く会って相談にのってほしかったのに」

――なぜ福島さんは電話を取らなかったのでしょうか。

「会ったときに確認したら『体調が悪かった』と言っていました。前の晩、重野（安正）幹事長と4時間ぐらい話した後、遅くに福島さんから電話があって『党を離れようかと思う』とお伝えしました。次の朝もかかってきて『どこかで会えないか』と言われたので参院議員宿舎まで福島さんに会いに行ったのです。離党届を出すため地元・大阪に行く直前です。もう離党する決意は固まってしまっていました」

「理想や夢を大事にしているから現実から目を背けてはいけないと思っています」とも語った

土井氏から初心に帰れ

――辻元さんを政界に誘ったのは土井さん。決断する際に事前に相談しなかったのですか。

「土井さんに会ってしまうと決断が鈍ってしまうと言いますか、本当につらくて事前に会えませんでした。離党表明から一夜明けて電話しました。『辻元、初心に帰れ』と言われました。その声を思い出すだけで涙が出てきそうになりますけど。私の初心は憲法と自社さ政権です」

――福島さんとの間に確執があったという報道もあります。

「（確執は）一切ありません。閣内にいるときはお互い毎日何度も電話をして閣議にかかる法案の中身や国会答弁について相談、調整していました。だけど、福島イズムと辻元イズムは違うんですよ。彼女は独自色を鮮明にして筋を通す。私は調整型。180度違う考え方の人にむしろ飛び込んで抱きついてでもこっちを見させるタイプ。目指す方向は一緒でも方法論が違います」

――で、いままで一緒にやってきてなぜ離党になるのですか。

「5月末に連立離脱するときに開いた全国幹事長会議で『筋を通そう！』『闘おう！』と党員の方々の多くが久々に生き生きしていたんですよ。参院選の結果を受けてそれを思い出しました。社民党は中途半端ではアカン、福島イズムで徹底して反対勢力として旗幟鮮明にするのがいいんじゃないかと。ただし、自分は別のやり方が向いている」

「政権に食らい付く」

――その「別のやり方」とは。

「政権の中から『なんぼのもんじゃい！』と騒いで沖縄の声を直に伝え続けるのもありかなと。私は大阪商人の娘。自分の言い値が通らなければ値切り交渉して落としどころを見つける。子どものころから妥協しすぎないところで粘ってうねうねやるほうが生き生きします」

――社民党では次の選挙に勝てないと思ったからですか。

「現政権は民主党、国民新党と一緒に力を合わせて作った。私は野党共闘候補として小選挙区で当選しました。言うたら政権交代の象徴的な選挙区。『辻元』と書いていただいた有権者から託されたのは新政権で努力すること。実際に支援者に聞いて回ったらそういう意見が大半でした。そこで党よりも国民の意向を第一に離党を決断しました」

――社民党を切り捨てたとも言われています。

「社民党は権力の暴走をチェックするために日本になくてはならない政党です。議員定数削減が通されたら社民党も共産党も厳しい。国会から護憲勢力が消滅します。私は政権に食らい付いてでも『そんな法案作らせへん』と言い続けます」

――やはり小政党では政策は実現できないということですか。

「そうは思いません。1996年に初当選したときは自社さ政権でした。定数500のときで自民239議席、社民15議席。社民が手を挙げないと過半数に達しません。初めは『なんで自民党と一緒にやらなあかんの？』と思いましたが、せっかく組むなら取れるもん取ったれと。1年生議員にして議員立法でNPO法を産み落とす経験もできました。一方で社民党が離脱したとたんに国旗国歌法や周辺事態法が通った。社民党が政権内にいることがタカ派的な政策の歯止めになっていた。『政治は数だけじゃない』と学びました」

「メガトン級に苦しい」

――「与党のうまみ」を知ったのでは、という声もあります。

「うまみどころかしんどいことだらけですよ。国土交通省の副大臣のときは『ポストに毒されてへんやろうか』『官僚に洗脳されてへんか』と毎日葛藤しながら仕事していました。そもそも国交省そのものが現実と理想の葛藤の場なんですよ。現実世界の矛盾ばかりを扱っていますから。八ツ場ダムだって『はい、ダメ』といえば片付くものではないやん。JALだってメスは入れるけども飛行機が毎日飛んでいるわけ。『天下り』『癒着』と言うて評論するのは簡単やけど働く人の生活もあるわけやから。試行錯誤、利害調整ばかり」

――離党を決断したのは50歳という年齢も関係あります？

「あるかも。初当選から15年目です。日本の政治を担う中堅議員の一人としての自覚を持たねばと思い始めました。偉そうに聞こえるけど。結婚もしてないし子どももいない。これからもあらゆるエネルギーを世の中を変えることに注いでいきたい」

――離党会見は表情が硬かった。

「そりゃ悩みますよ、10年以上いた政党を離れるわけですから。お世話になった人の顔が次々と浮かんできて申し訳ないと思う。参院選が終わってから布団に入っても寝られないし、食欲もない。1週間で体重が5キロ減りました。自分の体じゃないみたい。メガトン級に苦しいです」

政界流動化を視野に

――他党から誘いはありますか。

「ないです。親しい議員から『びっくりした』とは言われるけど」

――6月の通常国会の終盤、本会議場で小沢一郎氏に近づき話し込んでいる姿を見ました。

「小沢さんとは自由党時代から選挙協力を通じてよくお話ししてきました。普天間の辺野古移設はアカンという考え方は共有しています。だけど、あのときは幹事長を辞任されたから『お疲れさま』と言っただけよ」

――無所属のままでいると国会活動に制約が多くなります。

「よくわかっています。よく離党した人が『政界再編を』『龍馬になる』とか言うやんか。言う前にやらんかいと思うので、ああいう大風呂敷は広げません。1人は微力だけど無力ではありません。自社さ政権と鳩山政権のネットワークを大事にしながら、政界が流動化したときに自分なりに動きたい」

――「政権にかかわる」と言いますが無所属でどうやりますか。

「電話かければええやん。政権を離れてからも相談をもらっています」

――無所属で活動する際のモデルはありますか。

「中曽根元総理にも無所属のころがあったみたい。それを心得とします。野田聖子ちゃんにも聞いてみようかな」

――同じ市民運動出身として菅首相をどう評価していますか。

「もっと伸び伸びとやってほしい。市民運動の人が政権に入ると行儀よくせんとあかんかなと思ってしまう。私もそうだったもん。エスタブリッシュメントの人と付き合わないといけないから何でも知ったふりせんといかんかなと守りに入ってしまう」

――民主党の代表選は気になりますか。

「自分のことで精いっぱいです」

聞き手　編集部　常井健一

photo　高井正彦